

令和7年度 第2回 京田辺市社会教育委員会
会議要旨

1 開会

2 委員長あいさつ

3 議題

(1) 活動報告

京都府社会教育委員連絡協議会総会及び複合型公共施設基本計画検討懇話会の報告を出席委員が行った。

(2) 第3次京田辺市子ども読書活動推進計画の策定について
事務局が資料に基づいて説明した。

【各委員からの意見等】

(委員) 小学生のころは移動図書館を楽しみにしていた。大人になってからは行かなくなった。教科書もデジタル教科書が出てきた。図書館はどうなっていくのか。

(事務局) 紙と電子を併用するハイブリッドが理想だが、全てのジャンルの図書が電子化されているわけでもない。全てを電子図書にするのではなく、ターゲットを絞っていきたい。まだ研究段階である。

(委員) 教科書もデジタルのものは二次元コードをクリックするとそれに関連した音声や映像が見られるのは評価すべきところ。紙とデジタルを併用していきたい。

(委員) 母が子どもの小さい時から読み聞かせるのは効果的。読書の習慣は良い。図書館でも取り組んでいるが、読み聞かせは読書推進に大きな効果を持つ。

(委員) デジタル化が進み、企業はほとんど紙を使わない。便利になっているし、どんどん取り入れていけばよいが、失ってはいけないものもある。情報の検索や文書の作成などデジタルに任せてもよいが、本を読む喜びを子どもにわかつてほしい。

(委員) 小学校の学校司書を増やしてほしい。週に数回しか来ないので、子どもが卒業した保護者ボランティアに頼っている小学校がある。

(事務局) 学校司書でなくて教員も図書室を開館できるので、学校司書の増員予定はない。

(委員) 学童に移動図書館が来ると、驚くほど子どもが集まる。図書館に行けない家庭は助かっている。本屋が減り、大人も時間をつぶす余裕がなく、本に触れる機会がない。そのため、図書館に行く機会が増えた。本は心に栄養として残る。大人も子どもも本が好きになって欲しい。本は1冊じっくりと読み込んでこそ心に残る。

(委員) 子どもが本を読まないのは、大人が読むところを見せないからではないか。子どもは親の姿を見ている。大人がスマホばかり見ているから、子どもも本を読まなくなったりするのは大きな問題。映像文化を否定するのではないが、子ども達に読書を進める前に大人が読書をしないといけない。

京田辺市立図書館サービスアクションプランについての記載があるが、京田辺市から文字文化の復活を目指します、などというのがミッションであるべきだと思う。

(委員) デジタル化がここまで進むと悲観的なことしかない。1日1秒でいいから紙に触れるキャンペーンでもすれば良い。子どもは吸収力がものすごいから、その機会を与えることが一番大切だ。

(委員) 北部分室は冊数が少ないので、楽しみが少ない。カフェや子どもの遊ぶところが併設された図書館ができれば、今まで図書館に足を運ばなかつた若い保護者や本に興味がなかった人も足を運ぶのではないか。これから新しい図書館ができるのは、ある意味大きなきっかけになる。

(委員) この会議の意見を計画に反映させて欲しい。京田辺市オリジナルのものとして欲しい。図書館は、本の魅力が分からぬ人が運営するのではなく、本の魅力を信じている人が運営して欲しい。

(委員) 第3次の計画の目玉が何か表に出ていたら、次の5年間に何をやるのかわかりやすいのではないか。京田辺に根付いたものやキャッチフレーズがあれば良い。学童に来る移動図書館が学童の児童しか利用できないが、地域の人にも開放して欲しい。

(3) 京田辺市の社会教育について

事務局が資料に基づいて説明した。

【各委員からの意見等】

(委員) 提案の中に「先生に地域を研究対象として活用していただけるようお知らせいただき」とあるが、どういう意味か。

(事務局) 学生や教職員に京田辺市を研究対象にするよう広報するということ。

(委員長) 学生がボランティアイベント等に参加することがあるが、学生だけでは地域課題に取り組むのは難しい。研究テーマとして、地域課題に対する提案をしてもらい、先生と学生がセットで取り組んで欲しい。

(委員) 先生にとって論文は重要な仕事。大学は研究と教育が二つの柱。市や区・自治会が地域課題を情報発信して、大学が研究対象にして欲しい。

(委員) 田辺町近代史の制作に係わる中で、南山義塾で新島襄がスピーチをしていたことを知った。市民と先生が合同研究組織を作つて、歴史を古代から掘り起こして欲しい。

(委員) 自治体で問題になっていることの研究は、十分研究成果につながる。リカレント教育の場として推進していくことが望ましいと記載があるが、学生の講座を市民も受講できるようにとか具体的な事例を入れたほうが分かりやすいのではないか。

(委員) 市民が図書館を自由に使える大学もある。ヒューマンカレッジの時だけ利用できるとか、一定期間だけ利用できるという考えは良くない。市民が大学に触れるができるように、もっと主張してよいのではないか。一般の人が大学に入ることで学生の意識も変わるので意味がある。学長に市民と同志社はもっと交流して欲しいと伝えた。これまでの交流を踏まえながら図書館の開放などを希望するなど、大学に伝えなければ実現しない。ヒューマンカレッジで学長と市長が対談していたが、学生と市民も交流して欲しい。リカレント教育を始めとした深い学びを提供して欲しい。社会教育委員会議として、京田辺市の社会教育をもっと発展させるために市民が参加できる機会を増やして欲しいと伝えなければならない。受け入れるかどうかは同志社が決める。

(委員) 社会教育委員から提案するにはこの提案はオーバーではないか。学生と地

域参画の推進についての提案は、範囲を広げすぎではないか。

(委員) 同志社との連携は市民参画課で行っている。教育長名で市の方針を提案するはどうかと思う。市の担当課に働きかけるのが筋ではないかと思う。

(委員長) 依頼はあえて抽象化している。具体例の記載をしたほうが通じやすいのではないか。関係部門と調整し、関係部署との認識がずれないようにしてほしい。今回の提案の大きな目的は、学生には、京田辺市で過ごす4年間にいろんなことを学んで欲しいというもの。学生のメリットを記載して欲しい。市からの要望が目立っているように感じる。学生には、京田辺市から大きな何かをつかみ、その後の人生の財産にして欲しいと思っているので、そのことも記載して欲しい。

(事務局) 社会教育として関係性を深めることによって相互のメリットを提案するような文言に修正していく。社会教育委員会議から提案を受け、教育委員会として教育長が同志社にお知らせすると認識して欲しい。具体例は、市が同志社に提案書としては示さないほうが良いのではないか。

この提案は、社会教育委員から教育委員会に提案いただくもの。市民参画課には、この協議内容についてはその都度報告している。今回のことも報告し、進めていく。

4 その他

- (1) 同志社女子大学まちづくり委員会と地域住民との交流会の実施報告及び今後の実施予定を報告した。
- (2) 京田辺市ハートフルフェスタの案内を行った。

5 閉会 副委員長あいさつ